

札幌市民の心に響く

## 時計台の鐘

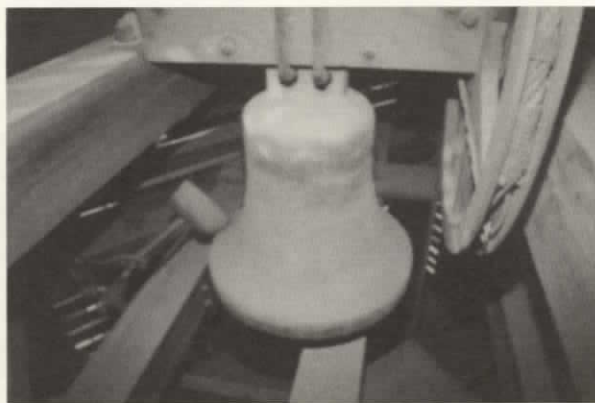
「わたしたちは、時計台の鐘がなる札幌の市民です」市民憲章にもうたわれている時計台の鐘。その言い伝えを紹介します。

札幌のシンボル・時計台は、明治十一年（一八七八年）、札幌農学校（現北海道大学）の演武場として建てられました。時計と鐘が取り付けられ、札幌に時を告げ始めたのは、十五年（一八八二年）八月のことです。

『カーン、カーン』という少し甲高い独特の音を響かせる時計台の鐘は、東京・赤羽にあった工部省の工場で作られました。出来上がってみると、当初注文されたものよりも大きかったため、建物を改築して取り付けられたとも言われています。

この鐘には、実はちょっとした言い伝えがあります。

鐘が工場で作られているときに、偶然、見学者が数人来ていました。その人たちは、今作っている鐘



時計台の鐘 高さ73 $\frac{1}{2}$ 、底面直径71 $\frac{1}{2}$ 、重量約226 $\frac{1}{2}$ kgで、1時に1回、2時に2回と、時刻に応じて鳴ります（札幌市時計台所蔵）

が蝦夷地の原始林の中に建てられた学校で使われると聞き、非常に驚いたそうです。さらに、時刻を知らせるだけではなく、将来、開拓の主力となって活躍する若い人の心を育てるためのものであると聞き、皆、大いに感動したそうです。

その中に、特に感激した様子の若い女性がいました。女性は、従業員に「ぜひ、その鐘を鑄型に流し



創建百周年を迎えた時計台（昭和53年）  
（札幌市写真ライブラリー所蔵）

込むところを見たい」と頼み込み、鐘の原料となるスズや鉛が真っ赤に溶けているつぼの前に案内してもらいました。そして、「この鐘が、札幌の人々の心を温め、励ます鐘になりますように」と祈りを込め、

付けていた高価な指輪をその中に投げ入れたのです。指輪は、女性の見ている前でどろどろに溶け、しつかりと鐘と交じり合っていました。

鐘はその後間もなく出来上がり、無事、札幌農学校に送られてきました。そして、その祈りが届いたのでしょうか、百二十年たった今でも、札幌の街の中心で正確に時を告げ、私たちの心を魅了し続けているのです。

昭和八年から親子二代で時計台の保守を担ってきた時計師の井上和雄さんは、幼い頃からこの鐘の音がとても好きだと言います。「周りに高層ビルが建つてから、音が届く距離は短くなりましたが、この音の魅力は変わりません。晴れた真冬、特に冷え込んだ日には、鐘の音も透き通るように美しく聞こえるんですよ」と、優しい笑顔で話してくれました。

（平成十四年十二月号・第八十七回）